

考古学と記紀の相克

——小林行雄の伝世鏡論——

春 成 秀 爾

-
- | | |
|--------------|-------------|
| 1 序説 | 3 小林が変化した理由 |
| 2 伝世鏡論の根拠の変化 | 4 小林が変化した背景 |
-

論文要旨

小林行雄は、1955年に「古墳の発生の歴史的意義」を発表した。伝世鏡と同範鏡を使い、司祭的首長から政治的首長への発展の図式を提示し、畿内で成立した古墳を各地の首長が自分たちの墓に採用していった意義を追究したのである。この論文は、古墳を大和政権の構造と結びつけた画期的な研究として、考古学史にのこるものと今日、評価をうけている。

小林は、この論文で、鏡と司祭者とのかわりを説明するために、『古事記』・『日本書紀』の神代の巻に出てくる天照大神の詔を引用した。しかし、神の名を意図的に伏せた。この論文以後も、小林は伝世鏡について言及したが、天照大神の言葉を使うことはなかった。

1945年の敗戦前には、国民の歴史教育の場では、日本の歴史とは天皇家の祖・天照大神で始まる記紀の記述を歴史的事実とする「皇国史」のことであった。そこには、石器時代に始まる歴史が介在する余地はなく、考古学の研究成果は抹殺されていた。敗戦後、石器時代から始まる日本歴史の教育がおこなわれるようになる。しかし、科学的歴史を否定し、「皇国史」を復活させようとする政治勢力が再び勢いをもちかえしてくる。

小林は、敗戦前から、記紀の考古学的研究につよい関心を持ち、それに関する論文を書いてきた。けれども、実証を重んじる彼の学問で、実在しなかったはずの天照大神の言葉を引用することは、一つの矛盾である。さらに、神話教育を復活させようとたくらむ勢力に加担することにもなる。小林はそのことに気づいて、伝世鏡の意味づけに天照大神の言葉を用いるのをやめたのではないか。昭和時代前・中期の考古学研究は、皇国史観の重圧下で進められたことを忘れてはならない、と思う。